広島県における明治期学校運動会の考察

鶴岡英一*

(昭和50年8月5日受付)

A Nature of the School Athletic Games in Meiji Era in Hiroshima Prefecture

Eiichi TSURUOKA

(Hiroshima University)

明治期における広島県の学校運動会の変遷を検討して、欧米には例をみない学校行事といわれている運動会の特質を明らかにしようとした。考察結果は次のように要約される。

1. 学校運動会は体育奨励のために始められ、初期の数年間はこの性格が比較的純粋に維持された。
2. 1890年頃から学校運動会はその民衆動員性格のため様々に利用され、学校行事から地域社会の行事へと変質を余儀なくされた。
3. 1900年以降、運動会の教育性の回復を求めて批判が高まるが、教育の枠組を越えてしまった運動会は、教育関係者の努力にもかかわらず、実質的には変化しなかった。

This is an attempt to articulate the characteristics of the school athletic games in Japan, a kind of school-sponsored athletic activities which has no counterparts in European and American school activities.

The tentative conclusions derived from this study are as follows:

1. The athletic games were originated on purpose to supplement and promote the physical education. And this orientation had been maintained rather purely during the first several years.

2. From about 1890, the athletic games had been used for non-educational purposes, because of their own popular mobilizing nature, and were necessitated a transformation of their nature from one of school activities to one of community activities.

3. From 1900, this transformation had been under a growing criticism which aimed at the restoration of original educational orientation of the athletic games. But by that time, they had acquired the attributes which were beyond the framework of education, and therefore, in spite of many educators' efforts, their non-educational perversion continued without substantial changes. (Eiichi TSURUOKA : A Nature of the School Athletic Games in Meiji Era in Hiroshima Prefecture, *Research Journal of Physical Education*, Vol. 20, No. 3, Dec., 1975 pp.167~176.)

* 広島大学

は じ め に

明治期の運動会についてかなり早い時期に問題提起をしているのは岸野雄三²⁷⁾²⁸⁾である。岸野は運動会が欧米の影響を受けて生まれたものでありながら、日本独自なものとして発展することに注目して、運動会が「競技的要素」、「娯楽的要素」および「デモンストレーション的要素」を骨子としていることをあげ、その独自性をわが国の市民社会の未熟さに求めようとしている。

今村嘉雄は、「十九世紀に於ける日本体育の研究」²⁹⁾において、明治期の運動会に触れている。これは「大日本教育会雑誌」に掲載された運動会について、(1)開催時期、(2)開催形式、(3)種目、(4)場所、(5)運動会の貢献などの項目について分析・検討を加えたものである。しかしながら、対象としている時期が、1884年から5年間に限られていることや、選ばれた少数の運動会であることなどから、明治期を通しての運動会の把握には問題を残している。

この今村の運動会の取り上げ方を踏襲して、地方体育史に適用したものに、平野稔の「大分県における明治体育史の研究—運動会、遠足—」¹⁴⁾がある。大分県共立教育会機関誌の1885年から1912年までに掲載された運動会について、「運動会が時代および社会的背景の中で発達する過程を明らかにする」ための考察がなされている。平野は今村の考察項目に加えて、「運動会に関する所感・意見」を取り上げ、また「時代区分」をして明治期を通しての年代的特徴の検討を試みている。

これらいうなれば「今村風」²⁹⁾の運動会史研究に対して、近代スポーツの受容の仕方に着目して運動会を取り上げているのが、荒井貞光の「日本人とスポーツについての一考察—学校運動会の歴史と社会的意味—」¹⁾である。荒井は近世の村落共同体において育まれた遊びの思想と運動会との結びつきを追求しようとする。しかしながら、運動会の社会的意味の展開に性急であるあまり、運動会そのものの検討がやや不足している。

また、山本信良・今野敏彦の「近代教育の天皇制イデオロギー」⁵⁰⁾は、明治期における儀式、遠足、修学旅行、展覧会、学芸会、運動会等の学校

行事について、天皇制イデオロギーとの関連において集大成を試みたものである。このうち運動会については、今村同様「大日本教育会雑誌」掲載の運動会を中心に検討を進め、明治初期の小学校運動会の特色として、「旗奪」「隊列運動」にみられる軍事的色彩、褒賞制度、祭りの性格等を指摘し、利用される運動会を強調する。ただ、1880年代の運動会が中心となっているために、明治期を通しての変遷には視点が向けられていない。

以上、運動会に関する主要な先行研究について概観したが、筆者の運動会についての問題意識を述べておきたい。

「学制」に始まるわが国の近代教育において、体育が定着するまでにはかなりの迂余曲折を経なければならなかったことは周知のとおりである。たとえば、尋常小学校における「体操」の取り扱いについても、必須科目・随意科目をくりかえして、教科として固定するのは、1900年の小学校令改正以降のことであった。つまり「江戸時代の教育的要素の連続体として接する素地のなかった」⁵¹⁾「体操」は、単なる上からの制度改革だけでは容易には定着しなかったのである。この制度と実際の教育活動との間隙を埋めるものとして、広くいえば、西欧の体育・スポーツの受容摂取の過程における“中間項”として、明治期の学校運動会を評価することができるのではないか。運動会に関心を寄せる第一の問題である。

次に、明治期の体育史研究においてしばしば指摘されるところであるが、個々の学校において「体操」がどのように消化されて教育活動として展開されたのかという実態把握にかかわる問題がある。特定の学校の「校務日誌」、「学校沿革誌」あるいは地方の教育雑誌等によって、「体操」の実態を告げる史料に接することができるが、これらは概して断片的かつ部分的であって、ある時期の、またある地方の体育の概要を把握するには、必ずしも十分ではない。このような意味において、学校運動会は直接的ではないにしても、学校体育の実情を時にかなりリアルに反映する性質のものとしてみることはできるのではないか。運動会への関心の第二の点である。

さらに、学校運動会が単なる学校行事ではなく

て、いわゆる町ぐるみ・村ぐるみの地域社会における年中行事的性格をもつものであることはよくいわれることであるが、学校運動会が学校から地域社会へ拡大されていく過程はいかなるものであったのか。とりわけ、地域社会の伝統的レクリエーションとはどのようなかわりをもつのか。学校運動会についての第三の問題点である。

およそ以上のような問題意識から、明治期における広島県の学校運動会を取り上げて、次の項目を中心に考察を試みたい。

- (1) 初期学校運動会の性格
- (2) 学校運動会の変質過程
- (3) 学校運動会の定着過程

I 運動会の系譜

わが国の運動会の発祥に関してしばしば引用されるのは、海軍兵学寮の「競闘遊戯会」(1874年)や札幌農学校の「遊戯会」(1878年)、あるいは東京大学の「陸上競技会」(1883年)である。しかしながら、運動会の地方への伝播という点では、「小学校に於ける体育上の实际的施設と運動会」の著者たちが、運動会の起源に関して、「明治14、5年頃体操伝習所に於て開催せる競技会なるものを以て嚆矢とす」⁶⁾と述べているように、体操伝習所を会場として行なわれた運動会に注目すべきであろう。坪井玄道は当時を回想して次のように説明する。

「各学校に体操科を置くことになったが、体操の教師が居ないので……各官立学校は体操伝習所まで生徒を連れて来てやった。各学校の運動会の如きも最初は伝習所で催うしたが、伝習所の卒業生が追い追い各学校に配置されるようになって、体操も運動会もだんだん自分の学校でやるようになった。」³²⁾

この伝習所を会場とする運動会は、周知のとおり体育奨励を標榜して開催されたものである。しかし、同じく体育奨励を謳いながらも、「東京体育会」の演習会にみられるように、体操伝習所関係者の日頃の修練結果を発表するという内容のものと、「東京府体育奨励会」におけるように、体育に未経験な小学校の「烏合の生徒」²⁾を集めて、体育の普及啓蒙を図ろうとするものとは、その

性格には若干の相違があった。

「東京体育会」の体操演習会における主要種目は、

「啞鈴体操」「棍棒体操」「器械体操」「障害物競走」「フートボール」「旗拾競走」「二人三脚競走」「袋脚競走」「戴囊競走」「球投競走」「旗取返競走」「銃劔試合」「人馬競走」「棒脚競走」「高跳競走」「幅跳競走」「徒競走」「弓術」「ベースボール」³⁾

などであった。これを東京大学の陸上競技的種目を中心とした運動会と比較すれば、自らの性格は明らかであろう。つまり伝習所における運動会は、学校体育の普及奨励を目ざし、具体的には普通体操を重視したものであった。そして体操伝習所卒業生の全国への配置²³⁾を考え併せると、この体操伝習所系譜の運動会が地方における運動会のモデルとなったものと考えられる。そして上記種目の多くが、明治期学校運動会の中心的種目として各地方へ普及していくのである。

II 初期学校運動会の性格

(1) 明治前期における広島県の体育事情

広島県における運動会の考察に先立って、明治初期の体育事情に触れておきたい。1873年の「改正小学教則」において初めて「体操」が具体的に示されたのであるが、このいわば学校体育の発足当初に、「体操」を実際に指導し得たのは、東京を中心とするごく一部の学校に限られていた。広島県のばあい、たしかに1876年の「学事報告」³⁴⁾が述べるように、「下等小学教則」に「体操」をあげて、「体操図ニ依テ之ヲ授ク」と規定しているものの、これをもって広島県においても「体操」が実施されていたと速断することはできない。何よりも「体操図」がこの当時、広島県に配布されたという事実²⁴⁾は現在のところ見当たらないし、また後述する師範学校の実情を考えれば、この洋風の「体操」を誰が教えるのかという問題にまず直面したのである。一般的に言って、小学校体育はかりに行なわれていたとしても、きわめて低調であったといえよう。「山県郡教育誌」はこのへんの事情を適切に説明する。

「……併しこの頃山県郡の各学校は校舎さへ民

家を賃借したるもの多く、専用校舎を有するもの極めて稀なる位であるから 勿論運動場の設備はない。加え教員は紋附羽織袴を着用し、下駄を穿ちて出勤する。生徒も亦長袖の袂のある衣服を着用し、草履若くは木履を穿って出席する有様である。そこで学制教育令時代は体操未教課時代と称してよいのである。」³⁹⁾ (傍点筆者、以下同じ)

一方、1874年に発足した広島師範学校においても、「学科日課表」³⁵⁾に「課外に毎日体操三十分」と規定しているが、1875年の同校年報が告げるように、「従来体操ノ制未タ完全ナラサルヲ以テ更ニ其規則ヲ厳ニシテ大ニ技術ヲ増シ 毎週水曜日午後生徒ヲシ演習シ其身ヲ壮康ナラシム」³⁶⁾という状態であった。そしてこの「生徒ヲシ演習」せしめたのは、たとえば体育に熱心であった矢部校長自らが指導した撃剣¹⁹⁾の類のものであった。当時の卒業生が回顧する「和服にタスキがけ」²⁰⁾という「体操」の実態は、中央のそれとはかなりかけはなれたものであったといわなければならない。このようなことから広島県学事年報³⁷⁾は、1881年および82年とくりかえして、「将来施設上必須ノ件」として「体育ヲ拡張」することを報告せねばならなかった。そして具体的には、82年7月、小学校教員を対象とする「体操」の講習会を開催して、ようやく「体操」指導への対応を始めたのである。

ところで明治前半期における学校体育の定着過程において、決定的とも思える影響力を与えたのは、はかならぬ1883年の徴兵令改正である。この改正によって示された中等学校以上の官立学校の歩兵操練科卒業証書所有者に対する優遇措置は、これら諸学校に対して必然的に何らかの対応策を促すものであった。1883年および84年の広島県学事年報³⁸⁾は、「将来施設上須要ノ件」として「県立学校体操科中ニ歩兵操練ヲ加ヘントスル事」を報告し、実際には85年9月、県立学校に歩兵操練科を設けて、その指導を広島鎮台の陸軍士官に委嘱している。つまり広島県においては、「学校令」に先立って、徴兵令改正への対応という形で、中等学校以上の学校に、「兵式体操」が導入されていたのである。

(2) 広島県学校運動会の原型

広島県における本格的な運動会は、1886年2月開催の「県立学校小学校生徒大運動会」に始まる。現代からみればやや時期外れに行なわれたこの運動会は、前述の「歩兵操練」の6カ月の訓練成果を発表し、併せて新しく始まる「体操」の普及奨励を目ざすものであった。当時の広島県師範学校校長峯是三郎の報告する⁴⁾この運動会は、広島鎮台練兵場を会場とし、県立学校(師範学校、中学校、医学校、農学校)生徒357名、広島区内小学校生徒1347名が参加した大規模なものである。その運動遊戯種目は次のとおりであった。〈()内の数字は演技者数を示す〉

県立学校生徒の部

「啞鈴体操」(150),「棍棒体操」(30),「球竿体操」(150),「木環体操」(60),「兵式体操」(45),「競走旗取」(全員),「障碍物飛越」(45)

小学校生徒の部

「徒手体操」(350),「啞鈴体操」(400),「球竿体操」(200),「競走旗取」(全員)

これを一見すれば、「普通体操」を重視した伝習所系譜運動会の地方版という印象を与える。しかしながら、この運動会の正副「審査長」に前述の「歩兵操練」を指導していた鎮台の士官・下士官があたり、また「兵式体操」種目は演技者が少数であるにもかかわらず最も長時間が割り当てられたことを考え併せると、この運動会は陸軍が主導するという色彩が濃厚であって、「普通体操」重視とはいいい切れない側面をもっていた。

(3) 初期運動会の特徴

「県立学校小学校生徒大運動会」の開催から1890年頃までの数年間は、広島県運動会史の初期とみなすことができる。この時期の運動会はいわゆる学校運動会に限定され、運動会を行なった学校も限られていた。この萌芽期における小学校を中心とする運動会について、いくつかの特徴をみていきたい。

まず第一に、この時期の運動会は校外の「神社の境内」「河原」「公園」「空地」等において開催されるのが普通であった。このようなことから、学校から会場までは、たとえば、「生徒を男女に

区分隊列を組み受持教員之を引卒し午前十一時半学校を発す而して前に校名を記したる大旗を翻へし毎組に組長什長各小旗を持ち生徒は皆弁当を風呂敷に巻き肩より脇に取り行装最とも軽便に整へり荷車には大釜手桶薪鋏其他遊戯の引綱羽子板毬金環箆を積載せり途を愛宕町に取り……」⁷⁾ という情景が展開されたのである。明治期の運動会がしばしば、「長途運動」「遠足運動」とも呼称されたのは、会場までの遠足あるいは行軍が運動会にはつきものであったためであり、運動会と遠足とは共存していたのが当時の実情である。

次に初期の学校運動会は単一の学校が開催する例はきわめて稀であって、多くのばあい、数校が合同して開催する「連合運動会」の形式がとられている。これは一つには当時の一校当りの児童数にもかかわりがある。1887年の統計¹⁸⁾によれば、広島県下の小学校数882校、総児童数は99,778名であり、一校当りについては児童数113名、教員数1.8名であった。数字が示すように、一校単独で運動会を開催することは困難であり、勢い数校が合同せざるをえなかったのである。そしてこの合同の仕方は、小学校教員の年次練習会や月次練習会の地域区分の基準となった「小学校連合規則」の区分に準じたばあいが多い。このいくつかの町村にまたがった「連合運動会」の開催は、とくに農村における村落共同体的風俗習慣にやがて変化をもたらす一つの要因ともなるものであることに注意したい。

第三の特徴は、運動会種目には一般的傾向として「兵式体操」と「遊戯」が取り上げられていたことである。周知のとおり1886年以降明治年間を通じて、「普通体操」「兵式体操」「遊戯」が「体操」の主内容であったが、当初、地方の現場においては、「教則大綱」どおりに授業が行なわれていたわけではない。学校令公布当時の学校体育の実情はたとえば次の如きものであった。

「森文相の体操奨励時代に入りては柔軟体操と兵式体操とを課することになり、遊戯法も奨励せられ、順に体操科の面目を備ふるに至った……柔軟体操兵式体操の課せられている頃普通体操法が盛に講習されて小学校に課せられることになった。」⁴⁰⁾

つまり小学校体育の教材は、「兵式体操」「遊戯」が先行し、やがてこれに「普通体操」が加えられていくのである。このようなことから、師範学校付属小学校や広島市内の一部小学校を除いて、「普通体操」は運動会において行なわれなかったのがこの時期の特徴である。

第四の特徴には、一般に運動会と服装改善とを結びつけがちであるが、この時期の運動会開催と服装改善とは直接には結びつかなかったことがあげられる。広島県においては、1885年から86年にかけて、男子の中等学校以上の生徒は洋服を着用し始めている。これは前述の「歩兵操練科」の導入、「兵式体操」の必修化に対応するものであった。小学校については、一部の学校を除いて、明治年間を通じて洋服は着用されなかったのが一般的状況である。たしかに一部の学校においては服装改善の試みがなされているが、それは次のような困難さから出発しなければならなかった。

「其の頃最も急を要するものは、教員生徒の服装問題であった。山県高等小学校の兵式体操は申分ないが、尋常小学校簡易小学校の多くは、先生は襦袢に紋付羽織、生徒は袂付の着物に草履穿きであるから兵式体操に不格好なことは勿論であるけれども、何分小学校が創立以来十余年、断髪令が出てから十余年のことで、尚、髪を結うた男子が40%を占め、既婚の女子は99%まで歯を真黒く染めていた位の時だから、小学校の生徒に靴・洋服を揃へさせるといふことは容易の事ではなかった。」⁴¹⁾

この記述は当時の風俗を伝えてくれて興味深いものがあるが、それはともかくこのような事情にもかかわらず山県郡では、88年に沼田、高宮両郡と共同して、小学校生徒用の靴と洋服の斡旋をしている。

「かくて広島から洋服屋と靴屋が寸法取りに郡内を一巡した。併し出来上った洋服と靴とは全部に行渡ったのではない。山県高等小学校の外は、戸河内、加計、戸谷、大朝、壬生の尋常小学校だけであった。そして折角出来た洋服のホックが破損しても、地方に洋服屋が一軒もあるではないし、スグ広島へ町便で送らねばならず、靴の修繕は半年に一回位「靴直し」といふ

男が、裏皮を担いで廻る位であったから、遂に小学生の此の洋装は、自然にアトスボリになった訳である。」⁴²⁾

この「山県郡教育誌」の著者は、経済的視点を欠落させてはいるものの、当時の服装改善の困難さをリアルに描いている。そしてたとえば山県郡高等小学校の、「陸軍予備軍曹を任用して兵式訓練をなさしむ」⁴³⁾というような、森文相の強調する兵式体操に対する「熱病的な対応」にこそこの当時の服装改善の背景を求めるべきものであった。

総じて初期の運動会は、開催学校数においても、またそのプログラムからみても、小規模なものであったが、それだけにかえて「体育奨励」という性格が、明治期を通じて最も純粋に保たれていたといえよう。

Ⅲ 学校運動会の変質

広島県運動会史の初期に続く1900年頃までの10年間は、学校運動会の性格が決定づけられた時期である。大日本帝国憲法の制定(1889年)、教育に関する勅語の発布(1890年)、小学校令の改正(1890年)、小学校祝日大祭日儀式規定の制定(1891年)等の一連の国家政策の展開によって始まるこの時期においては、学校運動会も一教科や学校の行事という枠を越えて、時代の要請に答えねばならなくなる。

(1) 運動会と儀式

初期の学校運動会の開催時期を調べてみると、夏季休業期間の8月を除いて各月に行なわれており、開催時期についてはかなり恣意的であったことを思わせるが、90年代以降においては、春秋に固定化される傾向が顕著となってくる。

1891年に制定された「小学校祝日大祭日儀式規定」は、教育の国家統制強化の一環として学校行事を制度化しているところに特色がみられるが、学校運動会からみれば、祝祭日における体育奨励(第4条)および儀式の地域住民への拡大(第6条)に留意すべきであろう。改正小学校令が尋常小学校の「体操」を随意科目としたことともあいまって、学校体育が日常の教育活動よりも年中行事として注目されるようになる背景であった。

広島県における学校運動会と儀式との結びつき

は、91年、県内各学校で行なわれた「教育勅語謄本拝受式」に始まる。これは前年に発布された「教育勅語」の謄本を各学校が受領するための儀式であったが、文部大臣訓示⁴⁴⁾やそれを受けた県知事訓令⁴⁵⁾などに指示されて、各学校では大がかりなそして“厳粛”な儀式を挙行している。そして式後に「余興」として、もちまき、角力、運動会などを行なう学校が少なくなかった。この「余興」の発想についての検討は措くとしても、「余興」を儀式に組み込まなければ、児童や地域住民を“厳粛”な儀式に参列させることが困難であったというのが実態であろう。そして「平素欠席の生徒さへも来会」⁴⁶⁾する運動会のいわば民衆動員的性格が、学校運動会と儀式とを結びつける大きな理由であった。

ともあれ、1891年以降学校運動会は、「天長節」「創立記念日」「落成式」「戦捷記念日」などと結びつけて開催されることが多くなり、またこれらと関係のない運動会においても、「君が代」斉唱や「勅語奉読」がプログラムに組み込まれたり、高官貴顕が列席するというような形で、儀式化していくのが一般的様相であった。

(2) 学校運動会と就学奨励

広島県の学童の就学率は、1894年によりやく50%を越えるという状況であったから、この時期の教育関係者の最大の関心事は就学奨励にあった。すでに運動会の初期においても、会場までの行進に勸学歌などを歌わせる学校⁴⁷⁾がみられ、就学奨励の手段として運動会はかなり早くから着目されている。運動会を就学奨励に利用するという考えは全国的傾向であって、大日本教育会主催の全国教育者大集会においても、「就学勸奨法」が論ぜられ、その方法として運動会があげられている。⁴⁸⁾

神石郡の連合運動会について、「結果頗る良好にして爾来聯合各校とも就学児童非常に増加し父木野、高蓋二校の如きは校舎の改築を初むるが如き意外の効果を奏せり」⁴⁹⁾と報ぜられるほど、運動会と就学奨励とを結びつけて考える傾向が強かった。もちろん、長欠児童や不就学児童の問題は、年に一度か二度の運動会によって解決できる性質のものではない。むしろ運動会までも利用しなけ

ればならないほど、根深い問題であったと理解すべきであろう。そして多くのばあい、運動会終了後に「教育講演会」や「幻灯会」を催して教育の啓蒙を図るというのが、この時代の一つのパターンであった。運動会はこのための人集めの手段でもあった。

(3) 学校運動会の変質

学校運動会が体育奨励よりもむしろ別の側面からの期待に沿わねばならなくなってくると、当然ながらその内容も変質を余儀なくされてくる。それを端的に示すのが演技種目であろう。この時期のプログラムを「兵式体操」「普通体操」「遊戯」種目に大別して検討すると、「兵式体操」種目の後退と「遊戯」種目の増加を特徴としてあげることができる。

初期において重視された「兵式体操」は、1891年以降10年間は、小学校、中等学校、師範学校の運動会を通じてほとんど行なわれていない。この現象は広島県だけのことでなく、たとえば大分県についても同様なことが報告されている。¹⁵⁾

「体操」が随意科目となっていた尋常小学校は別としても、各学校の運動会種目に「兵式体操」が姿を消している事実は興味深い。運動会種目が直ちに学校体育を反映しているとは限らないが、この時期の「兵式体操」をめぐる問題の複雑さを示唆している。高津が指摘するように、³¹⁾ 森文相期に強調された「兵式体操」が連続的には発展しなかった一つの証左でもあろう。学校令当時、「兵式体操」に対して小学校までもが示した熱狂的と思える歓迎ぶりも、服装改善にみられたように「自然にアトスボリ」となったのである。

この「兵式体操」と対蹠的であったのが「遊戯」種目の急増である。くりかえし述べるように明治期における学校体育の教材は、「兵式体操」「普通体操」「遊戯」によって構成されていたが、前二者は、「施行規則」や「教則」の改訂のたびに、その内容が次第に細かく規定されていったのに対して、「遊戯」の内容についてはあまり触れられていなかった。つまり明治期のどちらかといえば固苦しい体操科の授業にあって、「遊戯」だけが、ある限界はあったにせよ、現場教師の自由裁量を許される唯一の領域であった。このことが一方で

は現場教師による遊戯研究や多くの遊戯書の発行を導き、他方ではその反映ともみられる学校運動会における「遊戯」種目の多彩・多様化を生み出したのである。

1891年から1900年までの10年間に広島県の地方新聞に掲載された運動会¹²⁾について、「遊戯」種目の頻度をみると次のような順位となっている。

1. 綱引, 2. 兎跳, 3. 旗取, 4. 二人三脚, 5. 障害物, 6. 徒歩競走, 7. 擬馬, 8. 球投げ, 9. グランドチェーン, 10. 提灯, 11. 旗送り, 12. 樽転し, 13. 球拾い, 14. 十字行進, 15. 民草

初期においてはみられなかった唱歌遊戯・行進遊戯が登場してこの時期の運動会に彩りを加えている。また教育的遊戯の意図がどのようなものであったにせよ、現実には即興的興味本位の種目が多くなってきたことは否めない事実であった。観衆も「普通体操」や「兵式体操」とは異なって、日本的に消化された「遊戯」種目に対しては、自分たちの子弟の演技を見守るということ以上に共鳴するものがあつたにちがいない。

いずれにしても「遊戯」種目の増加につれて、運動会は伸び伸びとした楽しく賑やかな一種の「祭り」的性格を帯びるようになってきた。これはたしかに木下の指摘する「運動会からの教育性の後退」²⁶⁾であったが、それは学校運動会が一教科の行事や学校行事の枠を越えて、その民衆動員的性格のゆえに、様々に利用されて時代の要請に答えねばならなかったことから生じてきたものである。またそれは、現場の教師たちが遊戯の教育性を自覚し強調しても、もはやとどまるところを知らず自転していく運動会の姿でもあった。

IV 運動会の定着と運動会批判

1900年から12年までの時期には、ほとんどの学校が運動会を行なうようになり、運動会は年中行事として定着するが、同時にその在り方をめぐって批判も高まってくる。

(1) 学校運動会の定着

これまでの学校運動会は、「校外」において数校が「連合」して開催するという形式が一般的であったが、この時期には「校内」において「単独」で開催する学校が多くなってくる。広島県のばあ

い、1903年を境として、「校内・単独」型の運動会は、「校外・連合」型のそれを凌駕し、以後、後者のタイプの運動会は次第に少なくなっていく。これはあらためていうまでもなく、児童生徒数の増加や運動場の整備などによってもたらされたものである。1900年の改正小学校令には「体操場」の設置が規定されているが、これによって直ちに各学校に運動場がつけられたと速断することはできないにしても、この時期を通じ徐々に整備されていったことは事実である。

この時期の学校運動会のプログラムは、「遊戯」「普通体操」種目に加えて、90年代には姿を消していた「兵式体操」も再び登場して、各種目の内容は従前にも増して豊富になっていく。前章においてとったと同様な方法¹³⁾で、「遊戯」種目を頻度順に列挙すれば次のとおりである。

1. 徒歩競走, 2. 障碍物, 3. 二人三脚, 4. 旗取,
5. 綱引, 6. 提灯, 7. 服装, 8. 兎飛, 9. 一人一脚,
10. スプーン, 11. 抽籤, 12. 計算, 13. 戴囊,
14. 千鳥, 15. 騎馬

これらのうちとくに上位の数種目は、どの運動会においてもみられるいわば運動会を象徴する種目として、固定化された傾向がうかがえる。そして「徒歩競走」「障碍物」「二人三脚」「旗取」「綱引」などを中心に、「体操」種目、時々の世相を反映した「競争遊戯」、低学年を対象とする「唱歌遊戯」などを配列するというのが、この時期の学校運動会プログラムを編成する基本的方式であった。この運動会種目の固定的部分は、明治期のみならずかなり後代までも引きつがれていくことは注目されてよい。なぜこれらの種目が固定化されて持続するのかということの検討は今後の課題としたいが、同一の学校の運動会種目を逐年的に調べてみても、その変化はきわめてゆるやかで、一度、年中行事化した運動会は容易にはその内容が変わらないことを示している。

これら学校運動会の一般的傾向の中にあって、部分的にはこの時期に特徴的ないくつかの現象がみられる。その一つは「選手競走」の出現である。中等学校においてはすでに、90年代の半ばから、たとえば広島中学の「チャンピオンレース」¹⁸⁾のように、代表選手による競走が行なわれている

が、小学校において「選手競走」が一般化するのはいかなり遅く、1900年代の後半からである。それは当初、中学校が運動会に小学校選手を招待するという形で始まる。当時中等学校のスポーツ大会を上級学校が主催するという形式を踏襲したこの試みは、忠海中学が「優勝旗競走規定」⁴⁸⁾を制定し記録を詳しく校友会誌に掲載した例のように、小学校選手の招待に様々な工夫をこらして、一種の流行とさえなった。その結果、三次中学校校友会誌が告げるように、「次は小学校選手競争……優勝旗は四年といふ四年まで、塩町の手に落ちた。……聞けば同校では、毎年我校の運動会が近よると、生徒は少額酬金して、毎日鶏卵等で選手を優待して遣る。だから選手は充分責任を自覚して毎日毎夜、数十町宛徒歩の練習をする……」³³⁾という過熱した事態までも招くようになる。

この中学校の運動会に触発されて、やがて小学校運動会においても「選手競走」が始まる。それは内にあるのは地域対抗、外に対しては学校対抗という競争意識を背景として、児童・生徒や観衆の熱狂を導き、運動会の「呼びもの」となっていく性質のものであった。

ところでこの時期の運動会における「体操」種目は複雑な様相をみせる。「兵式体操」の復活は前述のとおりであるが、1907年頃からプログラムには、「新式徒手体操」「各個演習」「徒手各個運動」「瑞典式体操」という名称の種目が登場する。これは明らかにスウェーデン体操を示すものであったが、学校によっては上記種目と「啞鈴体操」「球竿体操」を並行させてプログラムを編成しているばあいもあった。スウェーデン体操導入当時の体育事情を、再び「山県郡教育誌」から引用すれば次のとおりであった。

「普通体操の小学校に行はれてゐる 明治三十五年頃から川瀬元九郎、井口アクニ女史に依り^(ママ)瑞典式体操の我が国に移入せらるるありて斯界に大なる衝動を与へた。又此の頃は体育熱の勃興と共に行進遊戯、動作遊戯、競争遊戯が大に高唱せらるるに至り 實際小学教育者は其の取捨選択に迷ふ有様であつた。……明治三十九年八月二十三日より七日間……広島高等師範学校教諭西村虎太郎を招聘し此の新式体操講習会を開

催せられた。」⁴⁶⁾

しかし講習会を開催しても「取捨選択に迷ふ」現場教師の混乱が解消されたわけではなかった。岸野が指摘する³⁰⁾講習会の講師間の不統一や法規改正に至らなかった行政的処置の遅れなどによって、「普通体操」と「スウェーデン体操」の共存という現象を生み出したのである。学校運動会もこのような動きを敏感に反映したわけであった。

(2) 運動会批判

学校運動会に対する批判についてはすでに報告した⁴⁹⁾ので、ここでは学校運動会の何が批判され、何が改善されたのかということを要約しておきたい。総じて学校運動会批判は教育性の復権を求めたものであったが、具体的には次のような形で取り上げられた。

第一の批判は、運動会種目の選び方に向けられ、雑誌「芸備教育」の表現によれば「訓練の絶無なること」²¹⁾が問題とされている。つまり即興的興味本位の種目に偏って、日頃の「体操」教育の成果を発表するという本来の運動会の趣旨から、著しく逸脱しているというわけである。

第二は、この時期、学校運動会にも生じつつあった一種の選手制度に対して向けられた批判である。広島県師範学校長広瀬時治の、「各学校に於て行はるる運動会は其校に於て技芸熟達したるもののみを撰手として之に当らしめ観客をして興を買はしむるが如き恰も興行的の行為ありて……」¹¹⁾という批判が典型的な例である。

第三には、運動会開催の経費に対する批判がある。運動会費用の軽減法を議題とした山県郡の小学校長会同(1904年)⁴⁷⁾の例にみられるように、過熱し華美となったこの時期の運動会は、その経費の面からも問題となってくる。そして具体策として提案されたのが、賞品廃止であった。

これらの批判に対して運動会の全面的刷新を試みた学校はごく限られていた。この時期に創設された広島高師(1902年創立)の従前の運動会との区別を意識した「体操科演習会」²²⁾や県立高女の春には運動会、秋には「体操演習会」¹⁷⁾という試みは、たしかに運動会の在り方についての学校当局の模索を示すものであった。しかしながら、多くの学校では、せいぜいプログラムに若干の修正

を加えたり、賞品を廃止するといういわば運動会の部分修正をもって批判に答えるというのが一般的傾向であった。それは運動会が、もはや日常的教育活動の延長としてはとらえがたい、教育の枠組を越えた行事となったことを示すものであろう。

む す び

考察結果は次のように要約される。

1. 学校運動会は体育奨励のために始められ、初期の数年間はこの性格が比較的純粋に維持された。
2. 1890年頃から学校運動会はその民衆動員の性格のために様々に利用され、学校行事から地域社会の行事へと変質を余儀なくされた。
3. 1900年以降、運動会の教育性の回復を求めて批判が高まるが、教育の枠組を越えてしまった運動会は、教育関係者の努力にもかかわらず、改善されることなく独自の歩みを続けた。

運動会が学校から地域社会へ拡大される過程については十分に検討することができなかった。今後の課題としたい。

文 献

- 1) 荒井貞光「日本人とスポーツについての一考察——学校運動会の歴史と社会的意味」九州大学体育学研究、4～4：1～6、1971。
- 2) 大日本教育会雑誌、24：75、1885。
- 3) 同 上 31：58～59、1886。
- 4) 同 上 29：69～72、1886。
- 5) 同 上 別巻1：193、1895。
- 6) 藤山豊・福島楢二、小学校に於ける体育上の実際的施設と運動会、初版、宝文館、p.170、1912。
- 7) 芸備日日新聞、1887、12、1。
- 8) 同 上 1888、12、1。
- 9) 同 上 1892、4、19。
- 10) 同 上 1899、5、13。
- 11) 同 上 1901、11、5。
- 12) 同 上 1891～1900。
- 13) 同 上 1901～1912。
- 14) 平野稔「大分県における明治体育史の研究——運動会、遠足について」大分大学経済論集、23～4：69～

- 102, 1971.
- 15) 同上 86.
- 16) 広島尋常中学校同窓会誌「鯉域」2:60. 1897.
- 17) 広島高等女学校校友会誌「真己とのとく」6:118~19, 1908.
- 18) 広島県教育委員会, 広島県教育八十年誌, 初版, 同委員会, pp.178~83, 1935.
- 19) 広島県師範学校, 六十年回顧録, 初版, 同校, 第3編, pp.11~12. 1935.
- 20) " "
- 21) 広島県私立教育会機関誌「芸備教育」18:3~4, 1905.
- 22) 広島高等師範学校校友会誌, 9:1~18, 1908.
- 23) 今村嘉雄, 十九世紀に於ける日本体育の研究, 初版, 不昧堂書店, pp.968~79. 1967.
- 24) 同上, p.851.
- 25) 同上, p.889.
- 26) 木下秀明, 日本体育史研究序説, 初版, 不昧堂出版, p.227, 1971.
- 27) 岸野雄三「運動会の歴史」カリキュラム, 臨時増刊号:4~6, 1958.
- 28) 岸野雄三「日本の運動会の由来と特色」体育科教育, 9:2~5, 1964.
- 29) 岸野雄三, 体育史, 初版, 大修館書店, p.199, 1973.
- 30) 岸野雄三, 近代日本学校体育史, 初版, 東洋館出版社, p.82, 1959.
- 31) 高洋勝「国民教育制度成立期の学校体育政策」体育学研究, 17~3:121~28. 1972.
- 32) 教育史編纂会, 明治以降教育制度発達史第一巻, 二版, 竜吟社, p.716, 1964.
- 33) 三次中学校校友会誌「巴峽」, 15:76. 1911.
- 34) 文部省第四年報, p.217, 1876.
- 35) 文部省第二年報, p.314, 1874.
- 36) 文部省第三年報, p.514, 1875.
- 37) 文部省第十年報, p.612, 1882.
- 38) 文部省第十一年報, p.609, 1883.
- 39) 名田富田郎, 山県郡教育誌, 初版, 山県郡教育会, p.935, 1943.
- 40) 同上, pp.935~37.
- 41) 同上, p.166.
- 42) 同上, p.167.
- 43) 同上, p.166.
- 44) 同上, p.176.
- 45) 同上, p.176.
- 46) 同上, p.938~39.
- 47) 同上, p.287.
- 48) 忠海中学校校友会誌「同遊」, 11:79, 1906.
- 49) 鶴岡英一「明治期における広島県中学校の校友会運動部について」体育学研究, 18~1, 9~22, 1973.
- 50) 山本信良・今野敏彦, 近代教育の天皇制イデオロギ一, 第1刷, 新泉社, 1973.
- 51) 同上, p.364.